

FUKUSHIMA 市民 インタビュー

地域で活動する団員のために
福島市消防団長(第35分団(平田)出身)

齋藤 長三郎 さんに聞きました!

🐰 入団のきっかけは?

20代前半の昭和50年、農業をしていた私に、地元でお世話になっていた方からお誘いをいただき入団しました。その後、活動していくにつれて、第35分団の班長から分団長、第7方面隊の隊長、本団の庶務部長、副団長を経て、今年の4月から市消防団長になりました。

🐰 活動内容は?

分団長会議や福島支部消防大会のほか、交通安全や防犯関係の会議や催しにも出席しています。また、消防団の活動は、火事を消すだけではなく、



福島市消防団長
齋藤 長三郎さん

りません。行方不明者の捜索・救助活動も行っていて、警察や消防本部の職員と、現地で一緒に活動して指揮を執ることも業務の一つです。

本日は、地元の分団で、昔のように現場で直接話しながら教えたい気持ちもあります。が、今は本団に従事している中で、各分団で働く団員が活動中にけがすることがないように、会合などで伝えています。

🐰 入団して感じていることは?

20代から60代まで、年齢や仕事も違うさまざまな団員がいます。その方たちからいろいろなことを学んだり、教えてもらったことが自分の財産にもなります。消防団に入団しなければ、こうした付き合いはできなかったと思いますし、入団してよかったと感じています。

最近、若い方が消防団員になるのが少なくなりました。とても寂しいですね。本業を持ちながらの活動ですので、毎回、出勤を強制するわけではありません。自分たちの住む地域、そして家族を守るためにも、若い人たちに消防団に加入し

てもらいたいですね。

🐰 今後していきたいことは?

昨年、1年かけて「新時代消防団計画」を作りました。団員の確保、消防施設・ポンプ車の更新、団員報酬など、各分団、方面隊長から現場の意見をいただきました。人口減少により年々団員数が減少する中で、消防団の機能の維持・向上、そして地域のために貢献していきたいと思っています。

住宅用火災警報器や消火器の設置あつせんなど、予防消防に団員と一緒に取り組んでいる市内6地区の女性防火クラブの皆さんには、本当に感謝しております。

地域の人のつながり、結びつきが、消防団活動を行う上でとても重要です。地域住民の消防団への理解と消防団員が活動しやすい環境を作っていくことが使命だと感じています。



▲福島県消防協会福島支部消防大会で支部長として式辞を述べる齋藤団長



We Love♥ ふくしま!

第21回『男女が共に輝けるまちに』

復興従事者の転出に伴い、福島市の人口減少の動きがより顕在化してきました。懸念されるのは、原発事故に伴う母子避難などにより、20・30代の女性や子どもたちの層が同規模都市に比べ薄くなっていること。これは、人口減少が加速する可能性が高いことを示しています。

かつて地域政策では、若い男性、特に長男を地元に残すことが望まれました。しかし、今の人口構成や若い夫婦が女性の実家に近い地域に引き寄せられるケースが増えていることを考慮すると、今日では、20・30代の女性に選択してもらえるような地域にいかんしていくかが従来に増して重要になっていると思われます。

そのためには、女性の望みに応じた働く環境が充実していることが条件のひとつになると考えています。福島県は、管

理的職業従事者に占める女性の割合は全国平均を上回っているものの、「女性社員が働きやすい都道府県ランキング」(参考元:株式会社グローバルウェイ)では43位(ちなみに男性社員でも41位)となるなど、現状のデータは必ずしも芳しいものではありません。

福島市も同様と考えられます。今年も市では経済界に対し、女性の一層の活躍促進と併せ、新たに女性の就労機会の拡大を要請しました。

また、待機児童の解消、教育の充実など子育て支援を一層強化するとともに、ファッショナブルで品揃えのいい商業施設など、買い物環境もより豊かにしていく必要があります。

固定的な役割分担の考え方から脱却し、男性もこれまで以上に家事などの役割を担うとともに、女性の活躍を促し、企画・決定・実行のさまざまな局面で多様な目線と感性を反映させていかなければなりません。

男女が共に輝けるまちに、そして福島市の将来のために、一人ひとりが一歩踏み出しましょう。

福島市長 木幡 浩